

看護記録にケリーさんの穏やかな様子を記録しておきながら、
不要な拘束指示を出し続ける医師に、なぜ意見を言えなかったのか

看護教員・瀬戸山陽子

今回パトリック・サベジさんの話を聴いて、私は心底恥ずかしいと感じました。それは、日本の精神科医療のお粗末さに対して、また、それを知らなかった自分自身に対する恥ずかしさです。

サベジさんのお話で私は初めて、日本の身体拘束の件数が諸外国に比べて突出して多いことや、その数が近年徐々に増えてきていることを知りました。罪人ではない人が不当に拘束されて亡くなってしまおうという、あってはならない事件が起きている。その裏には、多くの、カウントされない拘束例があると推測されます。人生に置いてそんな理不尽な思いをしなくてはならなかった方が非常に多くいるであろうことは、先進国の日本として非常に恥ずべきことです。

弟さんの事件があった後でもなお、日本を好きだと言ってくださるサベジさんに対して、自分は一人の日本人として、また医療者の端くれとして、何をすべきなのだろうと、自然と流れてしまう涙と共に考えました。

まず一つ目は、微力ながら署名活動に参加し、それを広めていくということでしょうか。幸いにも自分の周囲には、当事者と一緒に、当事者の立場になって誠実にものを考える医療者がいます。もちろんサベジさんのお話の後では、医療者に対する不信感が増しました。

しかしそれでも、日本には、「安全」という免罪符を盾にルーティンで身体拘束をしたり、責任逃れをする医療者ばかりではないことを、私は知っているつもりです。微々たる力ではありますが、地道に、周囲の医療者やもちろん一般の友人・知人に、この事実を伝えて署名活動を広めたいと思いました。

また今回話を伺う中で、「日本の医療」と「自分自身」に対すること以外に、もうひとつ恥ずかしいと思った事象があります。

それは、看護記録にケリーさんの穏やかな様子を記録しておきながら、拘束をするという医師の指示に従っていた看護師たちに対してです。

看護記録の「スタッフの声かけにも笑顔が見られる」「『今朝もありがとう』という発言あり」と記録した看護師たちは、目の前で拘束をされているケリーさんに、何を感じていたのか、どうして不要な拘束指示を出し続ける医師に意見を言えなかったのかと、同職である者として、悔しく申し訳ない思いが込み上げました。

日本は残念ながら未だに、医師看護師関係が旧態依然としており、医師の権力が非常に強い医療施設が多いと感じます。

また厄介なのは、そのことに医師も看護師も疑問を持たず、両者ともに悪気がないこと。ともすると、権力を振りかざす医師と物言わぬ従順な看護師は、お互いにそれがあべき姿であると信念を持っている場合さえあります。

患者に最も近いはずの看護師が、仮に身体拘束をされる患者の様子に疑問を感じていたとしても、医師の指示を守ることが優先されてしまうことは、看護師の姿としてはやはり非常におかしいものです。

しかしこんな中でも、幸いと言っていいのかわかりませんが、少なくとも私が日々接している看護学生は、様々なことに疑問を持つ頭の柔らかさをまだ持っているように思います。医師患者関係にも医師看護師関係にも、また、日本の医療の在り方にも、彼ら彼女らは敏感です。私自身がこの問題を知って、署名活動を広める以外にできることを考えたとき、未来の医療者になる看護学生に、この事実を伝えたいと思いました。そして自分はどんな行動ができるかを、一緒に考えていきたいと思っています。

今回の授業では、最愛の弟さんが理不尽に亡くなったという悲しいことを思い出してしまうながらも、サベジさんとご家族が、一生懸命日本の人々に伝えてくれていることの重みを感じました。

それをしっかり受け止めながら、できることをまず行動に移していきたいと思えます。ありがとうございました。